

# 「紅はつみ」登録申請

## りんご研が新種リンゴ

りんご研究所が約5年ぶりに世に送り出す新品種「紅はつみ」



りんご研によると、紅はつみは、ともに早生種の「つがる」（種子親＝めしべ）と「さんざ」（花粉親＝おしべ）の交配。早生種としては濃厚な味で、甘さと酸

## 甘さと酸味好バランス

黒石市の県産業技術センターりんご研究所は食味が良く、落果防止剤が不要なリンゴの早生種「紅はつみ」を開発、農林水産省に品種登録を申請している。認可は2018年の見込み。同研究所が約5年ぶりに送り出す新品種だ。（本間善幸）

味のバランスのほど良さが特長。歯触りが良く、果汁も多いという。「未希ライフ」、つがる等の一部を代替する品種として、9月上旬から10月上旬までの販売期間を想定している。名称は「秋の初めに紅い色の実が成る」を意味する。早生種主力のつがると異

## 改良に25年、苦労が結実

県産業技術センターりんご研究所は、新品種「紅はつみ」の品種改良に約25年を費やした。一般に品種登録される確率は、植えた種の数で換算すると約5千分の1。手間と根気を要する取り組みだ。

りんご研は92年に「つがる」と「さんざ」を交配した。できた果実の種から幼い苗「実生」を育て数年後、藤崎町のほ場に定植。99年秋に初めて実を付けた。以後、りんご研は毎年、味や色、形、大きさ、日持ち、収穫量、障害の有無、落果などを評価、不適な個

体を順次淘汰していった。2003年までに残った一つが系統名称「青り26号」となった。後の紅はつみである。その後、農家での現地適応性試験を経て16年、晴れ国への申請となった。

りんご研は89年前の1928（昭和3）年にリンゴ生産拡大と農家の収入のために品種改良を始めた。これまで40種余りの開発に成功した。

一方で初山慶道品種開発部長が「登録まで行くのはエリート中のエリート」と指摘するように、職員の苦

開発部長は「貯蔵性にやや難はあるが、食味は抜群に良い。成熟させると非常においしい」とPRする。期待の新品種は7、8日、りんご研の参観デーで注目を集めた。試食した平川市の柏木農業高校1年、佐々木智哉さんは「みずみずしくおいしい」と満足げ。一方で弘前市のリンゴ農家の男性（54）は「良い味」と前置きしながらも「店頭と前並んだ時の堅さが気に入る。市場への浸透度が高く、売れているつがるに代わるような安心感があるかだ」と栽培には慎重だった。

初山部長は「いろいろな人の手を経て評価されていくのがリンゴの品種改良。二十数年はかかる作業なので、以前交配したリンゴが退職後、登録されたという職員もいる。地味な作業だが職員は愛着を持ってやっている」と語った。（本間善幸）

平成29年9月24日東奥日報 掲載

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。